



1

2

3

4

1.開放感のある牛舎には人懐っこい乳牛が暮らしている 2.小高い丘の上にある放牧地からはきれいな海が見える 3.毎日ローリーで集乳。震災後は乳の出が悪くなり収量は震災前の4分の3にまで減少した 4.もうすぐ赤ちゃんが生まれるこのお母さん牛は松田さんが大好き

産地・メーカーをたずねて
松田牧場株式会社
珠洲市

珠洲の大自然に囲まれて 健やかに育つ牛

自然豊かな山あいにある松田牧場からは能登の美しい海が見えます。じわもーでおなじみの「のとそだち」の乳牛がのびのびと暮らしています。震災や豪雨災害を乗り越え復旧復興に向けて進んでいます。(12月10日取材)

episode 大好きな牛と一緒に

父が獣医であった松田さんにとって、小さい頃から牧場は身近なものでした。当然のように畜産の道に進み、2014年に放牧できる土地のある珠洲で牧場を始めました。松田牧場では現在約120頭の牛を飼育し、そのうち30頭が乳牛です。肉用牛となる子牛の繁殖・育成もしています。1日に30リットルもの乳を出す乳牛には、おいしい乳を出してもらうためにストレスをかけないよう環境を整えます。搾乳時にはゆっくりブラッシングをしながらリラックスして過ごせるようにしています。「モーと鳴くときは不満があるときなんですよ」。牛には大きく包み込んでくれるような優しさがあり、牛と触れ合うと落ち着くという松田さん。松田牧場の牛舎には静かで穏やかな時間が流れていました。

episode さまざまな苦難を乗り越えて

1月1日の震災では4舎ある牛舎のうち2舎が全壊、残った牛舎も大きな修繕が必要となる大変な被害を受けました。牧草地では地盤の隆起や崩落が起こり、断水・停電にも見舞われ、6人いた従業員の半数が2次避難をして3人で飼育を続けました。機械を使った搾乳ができず乳房炎になる牛もいましたが、3日にポータブル電源が届き、ようやく搾乳ができました。1月末に停電は解消しましたが、地震による断水は7月まで続き水の確保に追われ続けました。牛は1日に多いときで100リットルもの水を飲みます。震災直後、喉の渇きを訴え牛たちは1日中鳴き続けていたそうです。多くの人が力を貸してくれたことで水の確保ができたため、2月12日ようやく生乳の出荷を再開できました。

episode 牧場と地域の復興のために

壊れた牛舎の再建のために呼びかけたクラウドファンディングでは県内外から多くのメッセージとともに目標額を超える7,000万円が集まりましたが、資材の高騰や豪雨の被害により再建にはまだ資金が不足しています。「震災後は何度も心が折れましたが、能登に残った人のためにも牛のためにもやっていしかありません」。松田牧場がめざすのは地域の人たちが集まれる場所。「自然が美しいこの地で憩いの場を作り、地域のために牧場を続けていきたい。自然や動物とふれあう原体験は、子どもの可能性を伸ばします。ここに牧場があることで子どもが町に戻ってくることに貢献したい。そして地域をつくるお手伝いができればと考えています。でも今は牧場を維持することが最優先です」。私たちができることは何かを尋ねると「いつもありがとうございます。これからものとそだちを飲んで応援していただけたらうれしいです」と牛をなでながら静かに思いを語りました。

のとそだちは奥能登の8軒の酪農家の生乳のみを使用。松田さんは生産者のお一人です。



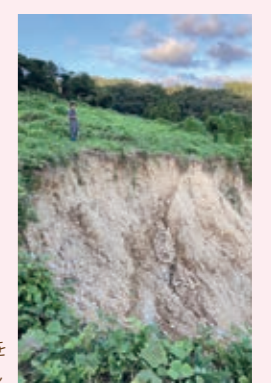
のとそだち 1ℓ
(次回2月3回)じわもー 311円(税込)

のとそだち
のむヨーグルト 150ml
(次回2月3回)じわもー 149円(税込)

--- Memo ---

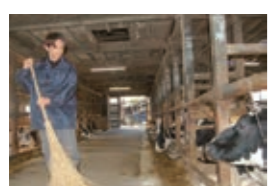
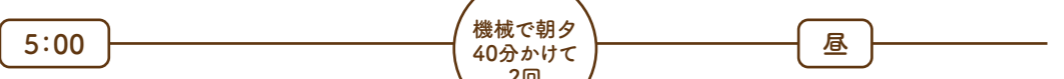
奥能登豪雨でも被害

昨年9月の豪雨災害では電柱が倒れ停電、地上に設置されていた水の仮設配管は土砂崩れで流され再び12月まで断水、道路は崩れ一時孤立しました。地震で崩れた牧草地は大雨によってさらに大きく崩れ、来年の牧草の収量が減少することも痛手となっています。豪雨の中、子牛が1頭生まれました。生まれてきた新たな命に希望を見いだしています。



崩れた牧草地を見回る松田さん

松田牧場の1日



牛舎の掃除



餌やり

牧草を発酵させたものに牛に必要な栄養である塩やカルシウムなどをかけて与えます。とうもろこし、ふすま、綿実なども大好き。



搾乳



ブラッシング



生乳の回収の立ち合い

震災で壊れた牛舎の修繕・雨で流された牧草地の柵などの修繕。新設牛舎の打ち合わせなど。



夏場は9時から18時頃まで放牧して牛は自由に過ごす

19:30

餌やり
搾乳



牧場には馬や猫も

